
神の発見

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の発見

【コード】

N8073S

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

二十一世紀、神が発見され、一人の少女が神から神具を盗んだ。

1 (前書き)

入院中に書いた創元SF短編賞一次落選作です。

二〇一一年、神が発見された。

神がなぜ人類の前に姿を現したのかわからない。しかし、発見された神はまちがいがなく、陳腐凡庸な被造物などではなかったという。それは、圧倒的な神秘性と慈愛に満ちており、また、それを見た我々人類の誰にも、それが神であると思われるように世界の完成像を知るものとして知覚できたそうである。神は、未来を知っておいでだった。我々人類をどう導こうかという当初の計画はすでに完成していたようである。これは誠に喜ばしいことであり、発見した他の大多数の人類からは、崇拜と畏敬の念をもって迎えられた。

しかし、ここにおおきな神の誤算があった。いや、それが始めから神によって仕組まれていたことなのかわからない。だが、神が人類に与えた自由意志によって、人類が神に抗いえるという証拠として示されたできごとであるとはいえそうであった。その大異変事とは、以下に述べるできごとである。

それはつまり、神を発見した者の一人である少女ユーは、神から世界を支える柱となるものを盗んで逃げたという。そのことによつて、世界の支柱に不安定な要素が与えられることとなった。それは、神を発見した他の者たちの大多数によつてまったくの予想外のできごとであり、人類がおそらく初めて遭遇した神との接触において、人類が世界を危機におとしいれることを行つたことがまちがいはなく確信をもつていえるのであり、少女が盗んだ神の道具がその後、どうなったのかはわからない。この、一人の少女による神への冒瀆を含めた一連のできごとに名付けられた名称が、いわゆる<神の発見>である。

<神の発見>について、全人類規模でその対処を決めるための会議が開かれた。この奇妙な神学会議の内容は、新聞や雑誌、インタ

インターネットやテレビなどによって全世界に公開されており、その内容の大部分はひたすら人類の背徳を糾弾するものであった。

せつかく、神がありがたくも我々人類の前に姿を現してくれたのにも関わらず、我々人類はその神に対して感謝もせず、供物も捧げず、あるうことが、神の道具を奪ったのである。これはゆるされることではない。断罪されるべきである。

神学会議は、徹底的にあらゆるものを断罪した。〈神の発見〉において、罪のあるあらゆるものをとりしまるために、断罪機関マキナがつくられた。マキナは、〈神の発見〉において罪のあったものをすべてを罰する権利を得たのである。

そして、〈神の発見〉で神具を盗んだ少女ユーは、断罪機関マキナに超越的背徳者として、罰せられる罪人にされたのである。

少女ユーは、とつくに逃げて姿をくらし、行方は知れなかったというのに。生きているのか、死んでいるのかさえ、わからなかった。少女ユーは完全に神学会議から逃亡することに成功していたのである。

少年ググは、『廃人使用』というネットワークに毎日、入り浸っていた。そこは、一般社会から見捨てられた退屈で閑散としたインターネット掲示板であり、ググはそこにいつからか出入りするようになっていた。

罪人A「ググ、新しい客が来たよ。また、世界が病んでいるね」

罪人ググ「新人さん？ でも、ここは会員制ネットワーク掲示板じゃないの？ 誰が許可を出したの？」

罪人A「司令官だよ。一発で合格を出したらしい」

罪人ググ「そう。それは悲しいことだね」

罪人A「なんだよ。仲間が増えたんだよ。喜びなよ、ググ」

罪人ググ「喜べないよ。だって、こんなネットワークに加盟しない方が絶対にいいじゃないか」

罪人A「そりやまたどうしてだい。消えていく者がたくさんいるこのネットワークでは、その分、新人が来てくれなければ、ここはすぐに廃墟になってしまうよ」

罪人ググ「きみがいなくなったら、僕は悲しむよ。ここでは、ついさっきまで話していた仲間がある日、突然、音信不通になってしまふんだよ。そんなのは嫌だよ。新人さんが来たってことは、いずれいなくなる仲間が新しく増えたってことだろ」

罪人A「それがな、そう悲しい話でもないんだわ。その新人さんな、聞いて喜べよ。なんとかな、いおっかなあ。やめとこうかなあ。ううん、どうしよう」

罪人ググ「なんだよ。いいたくないなら、いわなくてもいいよ。どうせ、悲しい知らせだろ」

罪人A「悲しいといえ、悲しいかなあ。でも、おれは嬉しかったね。だから、やっぱり内緒にしようかなあ。おれの寿命がのびちゃ

うよ」

罪人ググ「知りたくないよ」

罪人A「聞いておけ。だから、おまえはダメなんだ。こういう情報は少しでも積極的に聞いておいた方がいいんだ。それができないからおまえは、こんなところにいるんだ」

罪人ググ「はあ。なんとなく、わかったよ」

罪人A「なんだよ。いつてみるよ」

罪人ググ「いつてやるけど、当たってたら、絶対にその新人の情報を僕に教えてくれることが条件だ」

罪人A「いやだね。教えてやらねえ。クソして寝てる、ガキが。というのは、嘘。ううん、大事なググちゃんのためじゃないか。もちろん、教えてあげるとも」

罪人ググ「それじゃ、当てるけど、その新人さんってのは、女の子なんだから」

罪人A「え？」

罪人ググ「しかも、かなり若い」

罪人A「へえ、ググも成長したね」

罪人ググ「どうなんだよ」

罪人A「当たり前だよ。司令官が見つけてきた新人は、女の子だよ。しかも、おまえと同じくらい若い」

罪人ググ「いつ来るの？」

罪人A「知るか」

罪人ググ「悲しいことだね」

罪人A「そうだな。世の中、病んでるな」

罪人ググ「はあ。『廃人使用』が繁盛するなんて、僕は苦痛だよ」

罪人A「そういうこともあるめえ。おまえさん、ここの常連じゃないか」

罪人ググ「だって、こんな条件の会員制ネット掲示板に加入したがるなんて、敵か被害者だろ」

罪人A「だろな。なんていつたつてここは」

罪人ググ「なんていったってここは、自殺未遂者しか入れないネット掲示板だからね」

それから、ググは『廃人使用』で新人が来るのを待ちながら、雑談していた。話題は『廃人使用』の管理人の悪口。あんなやつは死ぬべきだとか、世界全部のネットワークを『廃人使用』にするべきだとか、なんだかそんな大袈裟な冗談。

世界全部を『廃人使用』にするということは、世界のすべての人々が一度は自殺未遂を行うことでもある。掲示板には、好き勝手な会話が書きこまれつつづけるが、掲示板の運営の妨害となる書き込みは削除される。

その日のうちに、新人は『廃人使用』にやってきた。自殺したくても、自殺できなかつた愚か者たちの集まりに。

罪人ユー「こんにちわ」

罪人ググ「やあ、きみが新しい仲間だね。ここの常連のググっています。よろしくお願いします」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「あんまり、話すの得意じゃない人かな」

罪人ユー「うん」

罪人ググ「自殺、うまくいかなかったんだ」

罪人ユー「そう」

罪人ググ「しかたないよ。政府が自殺のしにくいように世の中のいろんなところをいじってるんだ。だから、日本は自殺のしにくい環境に社会がつくられているんだ。日本で自殺するのは、難しいよ」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「あのさ、僕はさ、女の子とうまく付き合えなくてさ。もちろん、男ともうまく付き合えないけど。それで、自殺を考えたんだ」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「ユーは女の子でしょ。だから、僕とは話が合わないはずなんだ」

罪人ユー「ちがう」

罪人ググ「え？ 何？」

罪人ユー「だから、ちがう」

罪人ググ「よく話がわからないや」

罪人ユー「話、合う」

罪人ググ「そう？」

罪人ユー「そう」

罪人ググ「やった。ちよつとうれしい」

罪人ユー「喜ぶんだ」

罪人ググ「そうだね。喜んじゃいけないね。自殺を目指す僕らが、

この世に喜びを見出すことはまちがっているんだ。悲しいことだね」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「好きな食べ物とか、何？」

罪人ユー「意外」

罪人ググ「どうして？」

罪人ユー「話が上手」

罪人ググ「よしてよ。この程度で、うまいなんてことはないよ。僕

は世間ではやっていけないんだ」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「じゃあさ、僕も思いきって聞くけど、どんな男のタイプ

が好き？」

罪人ユー「生きている人」

罪人ググ「あははは」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「僕はまだ生きているよ。死のうとしてるけどね」

罪人ユー「嘘」

罪人ググ「本当だよ。『廃人使用』には、自殺者をからかって遊ぼうとする連中は入って来れないから。『廃人使用』にいる人はみんな

な自殺志願者だよ」

罪人ユー「そう、なの？」

罪人ググ「そうだよ。安心した？」

罪人ユー「複雑」

罪人ググ「あはは。どうか、ユーの自殺が失敗しますように。また会いたいからね」

罪人ユー「わたしの自殺は、難しい。止められてる」

罪人ググ「誰に」

罪人ユー「神に」

罪人ググ「神？」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「なんだか、複雑な事情があるみたいだね。よかつたら、聞くよ」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「いえい。きみを助けに来ました。生きる意味でも死ぬ意味でも」

罪人ユー「それは、嬉しい」

罪人ググ「よかった。安心した」

罪人ユー「わたしは彼氏とかを求めてはいないから」

罪人ググ「うん、いいよ」

罪人ユー「了解」

罪人ググ「自殺を神に止められてるって、本物の神に？ あの<神の発見>で見つかった神に」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「ごめん、変なこと聞いちゃったね」

罪人ユー「そう。当たり前」

罪人ググ「ええ！ ユーって、<神の発見>で神から盗難した犯人のユー？」

罪人ユー「そう」

罪人ググ「ええええええ！」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「それで、神から何を盗んだの？」

罪人ユー「たぶん、世界でいちばん大切なもの」

罪人ググ「それは何？」

罪人ユー「客体だよ」

罪人ググ「きやくたい？」

罪人ユー「そう。きやくたい」

罪人ググ「客体って何？」

罪人ユー「この世界の基盤」

罪人ググ「よくわからない。僕らのいる宇宙はその客体の上のっかっているの？」

罪人ユー「のっかっているというか、客体を観察しているのが、わたしたちの主観」

罪人ググ「じゃあ、僕の見ているパソコンの画面は主観なの？ 客体なの？」

罪人ユー「主観」

罪人ググ「じゃあ、客体って何？」

罪人ユー「だから、観察者が観測によって見ることのできるものを主観と呼ぶと、あらゆる主観を排除した客観的な世界のこと」

罪人ググ「客観的な世界……」

罪人ユー「そう。観測者は決して客体にたどりつくことはできない。しかし、世界は客体を基盤にして構築されている」

罪人ググ「きみはその客体を盗んだのかい？」

罪人ユー「そう」

罪人ググ「なんで？」

罪人ユー「だって、とつても小さかったんだもの」

罪人ググ「神さまは持っていたんだね。誰の主観にも偏らない本当に客観的な視点を」

罪人ユー「うん」

罪人ググ「それを持って、どんな感じだった？」

罪人ユー「いたたまれない」

罪人ググ「そりゃたいへんだ」

罪人ユー「うん」

罪人ググ「じゃあ、聞くけどさあ。この世界は、とつても歪んでい
るよね。一部の権力者や要領の良い人物に有利にできていて、まる
で平等でない。それって、ぼくの主観かなあ、客観かなあ」

罪人ユー「無言」

罪人ググ「そこで、無言なの？」

罪人ユー「うん」

罪人ググ「なんで」

罪人ユー「そういう難しいことは、確認していない」

罪人ググ「じゃあ、ユーは客体を手に入れて、何がしたかったんだ
い」

罪人ユー「夢」

罪人ググ「ゆめ？ どういうこと？」

罪人ユー「罪」

罪人ググ「つみ？ ますますわからないよ」

罪人ユー「もう少ししたら、話すから」

罪人ググ「うん」

罪人ユー「待って」

罪人ググ「うん」

< 神の発見 > から逃亡した少女ユーは、断罪機関マキナに追われている。そのことは、ググでも知っている。

ググにはわからない。ユーがいいやつなのか、悪いやつなのか。それは、ネット掲示板で話してみた感じではいいやつだったけど、ユーの犯した犯罪が、罪になるのか、許されるのか、わからない。ユーは、有罪だろうか、無罪だろうか。

< 神の発見 > 以前、神から物を盗んだら罪になるという法律はなかった。だから、ユーは刑法では裁かれない。なにしろ、かつて、神から火を盗んで人類に与えたという巨人プロメテウスはとびきりの英雄ではないか。

だから、神から、客体を盗んで人類に与えた少女ユーは、ひよつとしたら、とびきりの英雄になるかもしれない。だって、人類が本当に客観的な視点というものを手に入れることができるのだ。これほどの恩恵は他には考えられないだろう。

だから、ググは、断罪機関マキナと戦うことにした。マキナからユーを守る。

命などは惜しくない。もともとググは自殺志願者なのだ。断罪機関に逆らって殺されるといふのなら、願ったり叶ったりだ。何より、ググにとって、最も理想的な死に方は、戦死だという思想があった。自殺志願者が死ぬために戦争を起こすなど、甚だしく迷惑なことだと思う。しかし、ググは、それを行うために戦うことを選んだのである。

断罪機関マキナに逆らえば、おそらく死刑になるだろう。そういう当て推量がググにはあった。ユーのために戦って死ねば、それはとてもググにとって幸せなことだといえた。

ユーを守るためには、まずはマキナより先にユーのもとにたどり

つかなければならぬ。ユーが自分の居場所をネット掲示板に書き込むことはないと思われた。ユーは今、隠れている。マキナはユーの居場所を世界中を探知して探している。

そこで、ググは考えた。ユーと自分が会うのは無理だ。そんな恋愛劇にはこれはならない。ググはユーに片想いのままで死ぬのだから。

そもそも、まだ、ユーに彼氏がいるのかどうかだつて聞いていないじゃないか。

確かに、<神の発見>をしたユーに恋人がいたという話は聞いたことがない。だが、だからといって、ユーにすでに彼氏がいる可能性は否定できない。ちなみに、ググは、<神の発見>をした少女ユーが、それなりの美少女であることは聞いていた。

そこで、ググがとつた作戦は攪乱作戦だつた。単身、断罪機関マキナに殴りこみにいったのである。

断罪機関マキナは現在、東京に要塞を構えて、布陣していた。ググは、そこに、金属バットと百円ライターと十メートルロープを武器に、攻め込んだのである。

突撃のことは、『廃人使用』には書き込まなかつた。検閲されたらまずいからである。

だが、おそらく、これで死刑になるであろう自分のことを思つて、『廃人使用』に、

「またまた、自殺、に挑戦します」とだけ、書いた。

「がんばれ。よくわからないけど、とにかくがんばれ」とみんなに励まされた。

「さよならはいわないよ。いなくなる時は、いつも突然さ」という書き込みもあつた。

だけど、『廃人使用』の誰も、ググがマキナに突撃して戦死するつもりでいるとは思わなかつたようだ。ユーを除いて。

ググは、マキナの立入禁止のフェンスを乗り越えた。不法侵入だ。その時のググは知らなかったけれど、断罪機関マキナは、全人類を殺せるだけの兵器を要塞に集めていた。だから、それを知れば誰でも、射殺されるはずだった。

ググは、ユーを助けるために本気で断罪機関マキナを一人で壊滅させようと企んだ。作戦は、マキナにある爆弾の起爆である。

あるいは、もし、捕まっても、マキナの審問官と話し合い、ユーを無罪にするように説得することができればよいと考えていた。

とんでもないアマちゃんな考え方をしていたのである。

ググは、建物の影に隠れて、見つからないように要塞の武器庫を目指した。誰にも見つからないように、二晩、野宿するという努力を行い、ググは要塞の中の地理を少しずつ把握していった。その結果、なんとか、目的の爆発物保管所にたどり着いたのである。

当然、爆発物保管所は鍵がかかっている。だから、入れない。

だけど、大丈夫だ。爆発物保管所には毎日出入りする作業員がおり、作業員が一人のところを狙って金属バットで殴り、足の骨を折って、鍵を奪うことに成功したのである。

襲われた作業員は大声で助けを呼んでいる。このままいけば、捕まってしまう。そうならないためには、爆発物保管所の中の爆弾を爆発させるしかない。爆弾を爆発させて、マキナを壊滅させれば、ググは死んでも後悔しない。自殺志願者なのだ。

どうせなら、良いことをして死にたいと思うし、その手っ取り早い方法は戦死であり、しかも、上官の命令を無視した無謀な突撃による戦死であるし、ググにとってそれは、ユーのためにマキナを巻き添えにして死ぬことであるのである。

ググは、作業員が扉を開けた時に、金属バットで足を殴って、骨折させ、鍵を奪った。そして、爆発物保管所の中に入った。中は巨大な倉庫で、各種のミサイルや爆弾が置かれていた。

ググはその中で最も奥にあった特別区画にまでたどりつき、爆弾の起爆装置を作動させようとした。

間に合わなかった。

「何をしているんだ、おまえ」

十人以上の作業員が走ってやってきて、ググを取り押さえてしまった。それからは、強制的に力づくで連行された。要塞の作業員詰所に連れて行かれ、何をしていたのか、厳しく質問された。ググは死刑になりたかつたから、

「神に背くために、爆弾を爆発させるつもりだった」

といった。断罪機関マキナで、神を侮辱することは死罪に値する。神に背きたかつたといえば、おそらく死刑になるだろう。『廃人使用』が摘発されるとまずいから、ユーのことは話さない。すると、ググは、審問官の前に連れて行かれた。

審問官は、真っ黒な礼服を着ていた。

「我々は、罪を裁く者だ」

審問官はいった。

「きみは、神に背くために破壊行為を行ったようだが、まちがいないかね」

破壊行為とは、作業員の足を骨折させたことだ。

「ええ。まちがいないです」

ググは落ち着いて答えた。

「そうか。ならばよい。我々はこう考えているのだよ。神に背いたきみは死に値する重罪だが、人に背かれるような人徳のない神もまた有罪なのではないのかとね」

「はい？ 神が有罪？」

「そうだ。我々は神の罪を問おうとしているのだ」

審問官は堂々としていた。

「なぜ、神が有罪になるのですか」

ググは本気でわからなかったので質問してみた。もとより、断罪機関マキナがまともな機関ではないとは思っていたが、これほど異常だとは思わなかった。

「なぜ、神が有罪になるのか。確かに一見、不思議に思える疑問だろう。しかし、こうは考えられないかね。きみが神に背いたのは、神がきみに神に背かさせられたからではないかね。いわば、きみは、神に操られて、神の御業に手を貸したのだよ。でなければ、我々は納得ができない。神が、人に背かれるような失策を行うとは考えられないのだよ」

ググは黙って聞いていた。

話は、神から道具を盗んだ窃盗犯ユーのことにとんだ。

「例えば、<神の発見>で罪を犯した少女にしても、か弱き少女が一人で偉大な神を欺けるものかな。わたしはそれは無理だと思うのだよ。つまり、神から物を盗んだ少女にも、罪があり、少女に物を盗ませた神にも罪があると、こういうわけなんだよ」

その話は、ググをはっとさせた。それじゃあ、ひよっとして、ユーは。神が有罪なら、その神に手をかけたとさせるユーは。

「少女ユーは無罪になるのでしょうか」

そんなことばがググの口から思わずこぼれ出た。

あるはずのない期待がググの心の中に浮かんできた。ググは自殺する。だが、自殺する前にユーと共にわずかな時間でもすごせたら、それはとても幸せだろう。ユーが無罪になるのなら、ユーが姿を隠さずにすむのなら、会うことも不可能ではない。

だが、審問官はググのそんな思いを軽く吹き飛ばした。

「まさか。少女ユーの有罪は確定している。人が神の御心を悩ませるなど、重罪すぎる。少女ユーは死罪になるだろう。これはもう確定事項なのだ。変更はありえない。我々が探っているのは、いったいどれだけの者が彼女に連座すればすむのかという問題なのだ」

ググは審問官の迫力に気おされそうだった。

やはり、ユーは死刑になるんだ。なら、僕も死のう。ユーのために殉死しよう。そう、ググは考えた。

だが、この審問官はいったい何をいつているんだ。罪に連座するだつて？

「罪に連座するとは、具体的には、どのようなことをいつているのですか」

ググが聞くと、審問官が答えた。

「少女ユーが有罪なら、神も有罪、そして、それを生んだ人類全体も有罪なのではないかということだよ」

それはあまりにも衝撃的なことばだった。

「人類の存在が罪だというのですか」

「そうだ。最近の若者の中には、そう考えるものが多いらしいね。地球に生まれた生き物の中で、最も悪いのは、人類であると。人類は他の生き物を虐殺し、地球を独占して支配し、好き放題だ。これほどの罪があるかね。わたしは、そういう若者のことばを聞いているのだよ。複数の若者の人類を糾弾する訴えをね」

「だけどそんなのは」

「もちろん、世間知らずの意見にすぎない。彼らは動物学を知らない。野生がどれほど暴力と憎悪と苦痛と戦争に満ちたものなのかを知らない。生き物のために人類が死ぬべきだなどというのは、世間知らずの愚劣な意見でしかない。だが、我々の立場はちがう」

審問官は少し呼吸をした。

「もし、人類より優れた生命体が存在するなら、人類はその生命体のために、命を捧げるべきだろうか」

「それは、ちがう」

「そうだ。否だ。それでは、民主主義でない。未来は、あくまでも、科学と民主主義によって成り立つものでなければならぬのだよ。そこで、神の登場だ。民主主義によれば、神と人類は自由競争をする立場にある。科学によれば、神は、解体し、観察する観測の対象だ。その結果、結論が出つつある」

「それは、ひよっとして」

「そうだ。少女ユーを有罪とし、神を有罪とし、人類を有罪とし、過去のすべての存在を有罪あるものとして認めて死罪にしたのち、人工人類によって未来を築くことだ。こうすれば、人工人類はく神の

発見の罪を背負わずにすみ、また、神を科学することのできる研究者となれるのだ」

なんという意見だろうか。

ググは断罪機関マキナの描いていた計画に圧倒された。そして、気づいていた。マキナは、全人類を殺すつもりだ。

ユーだけじゃなく、ググだけじゃなく、全人類を殺してしまうつもりなんだ。そのために、こんなに時間をかけていたんだ。＜神の発見＞はそれほどまでに影響力の大きな事件だったのである。

「きみも、他の人類と同時に死刑になるのだから、それまで、余生を楽しんでくればいい」

審問官はそういつて、ググを釈放した。

釈放が決まると、ググへの拘束は急に緩くなった。逃亡を阻止するための見張りがいなくなり、審問官とも、対等に話ができるように、歓談する場が用意されていた。

ググは審問官に聞いた。

「神や人類を罰しようとするのは、断罪機関マキナの主観ではないのですか」

しかし、審問官はぴくりともたじろいだりしなかった。審問官は、神の代理人を表すかのように堂々としていた。

「判決が断罪機関マキナの主観であって、何がいけないのかね。何の問題があるのか、まるでわからないね。＜神の発見＞の罪を処罰する権限は、マキナに与えられているのであって、それはつまり、マキナの主観によって罪を裁け、とそういうことなんだよ」

審問官のことばに、ググは汗が流れてきた。大きな力に接するということ、大きな権力に接するということは、想像しているよりも困難なものだ。大きな権力は、崩れる時は脆いはずなのに、なぜかどこかで誰かが頑健に守っているものなのだ。

「神から盗まれたものが、仮に客体だったとしたら、どうしますか。客体です、客体。誰の主観に偏ることのない客観的事実が、客体で

す。もし、盗まれたものが客体だったとしたら、罪を裁くのに最も公正な者は、罪人少女ユーだということになりませんか」

「なんだと」

さすがの審問官も、神から盗まれた道具に話が及ぶと、権威をぐらつかされた。神から盗まれた道具が、客体であること。それは、審問官も知らない事実のはずだった。

だから、このたったひとつの事実で、断罪機関の存在根拠を根底から覆すことができるかもしれない。ググは、断罪機関の存在を否定しようと、論戦を張った。

「神から盗まれたものが、客体だというのは。なるほど。面白い流言だ」

審問官はあくまでもそれを流言として扱った。

「だが、神から盗まれたものが客体であったとしても、我々断罪機関マキナの権利は失われることはない。なぜなら、客体とは、誰もがもっているはずの存在基盤であるはずだからだ。だから、マキナにはマキナの客体があるはずであり、マキナが処罰をすることをマキナの客体が阻止できないかぎり、やはり、マキナはマキナとして存在して、処罰することができるのだ。なぜなら、マキナの主観と行動は、マキナの客体に根ざしたものであるはずだからである」

なんだか、審問官のことばは詭弁と化してきたようにググには思えた。説得が効いているのかもしれない。

ググは手ごたえを感じて押してみた。そこがまだあまい交渉術であったことには気づかず。

「マキナの行動は、それが正しく行われたように見えても、所詮は主観であり、客体から見たら、とんでもない見当違いな不公正な判断なのかもしれないのですよ。それがわかったら、主観によって行動するマキナは、客体を所持する少女ユーに逆らわないことです。わかりますか」

審問官は激怒した。

「まったくもって訴えを却下する。そもそも、少女ユーが客体を盗

んだというが、客体とは主観をよりどころに生きる我々人類にとつては決して触れることのできるものではなく、その客体とやらは、実際に存在するのか、証明不可能ではないか」

「しかし、もし少女ユーが客体をもっているのならば」

「黙れ。客体など、存在することを確かめることはできないのだ。だから、少女ユーが盗んだものは客体ではありえず、別の何かであるはずなのだ。はっきりいえることは、少女ユーが神から何かを盗んだことは確かであり、少女ユーが有罪であることだけは確かだということだ」

「客体が存在しないのなら、それを盗んだ少女ユーの罪が存在しないことになるのでは」

「それも不可なり。少女ユーが窃盗を行ったことは確実なのである。問題は、盗まれたものが客体なのか、客体でないのかだけである」

「だから、客体は存在するのですよ。神ならそれがわかるはず」

「おお、畏れ多き名を口にすることをお許しになられたまえ。神なら、客体に触れることも、その存在を確認することも可能であろうな」

審問官はやつとそれだけ認めた。

あとは、何をしゃべっていいのか、ググにはよくわからなかった。「そうです。神なら、客体を確認することも可能なのかもしれなのですよ。だから、少女ユーが盗んだものが、客体と、その客体を確認する手段の両方である可能性もあるわけですよ」

ググは、とりあえず、神の権威を頼りに、審問官を説き伏せようとした。しかし、審問官の応じた対応はまったくの非論理なものであった。解答は、解答となっておらず、議論はかみあっていなかった。審問官は激怒して、ただ、こういった。

「被告人が神の名を口にすることがそもそも冒瀆である。客体が盗まれたかどうかなどどうでもよい。とにかく、被告人は、神を冒瀆した罪により、死刑になる。死刑だ、死刑！ これは確定した判決である。覆ることはまずない。被告人は、少女ユーの罪に連座し、

人類と同時に死刑になる。わかったかね。とにかく、どいつもこいつも死刑なんだ。死刑だといったら死刑だ」

ググはもうとりつくところもないと思って、席を立つことにした。要塞から家に電車で帰った。

ググは『廃人使用』でユーを探した。二日後、ユーは『廃人使用』に書き込んできた。

罪人ユー「無言」

罪人ググ「ねえ、ユー。断罪機関マキナの審問官に会ったよ。それで、僕も死刑になるんだって」

罪人ユー「死刑？」

罪人ググ「そうなんだ。それで、いいにくいけど、やっぱり、ユーも死刑になるみたいだよ」

罪人ユー「無理」

罪人ググ「どうしてさ。マキナは、全人類をみんな、神に背いた罪で死刑にするつもりだよ。本気だ。逃げられない」

罪人ユー「ちがう」

罪人ググ「何がちがうんだい？」

罪人ユー「だって、それは主観だもの」

ああ、そうだ。ユーは客体をもっているんだ。

客体では、世界はいつたいどうなっているのだろうか。

それとも、それは、ユーの主観だろうか。

ユーに、ユーの主観と客体の区別はついているだろうか。

罪人ググ「ちよつと待って。僕のところに死刑執行の通知書が届いた。やっぱり、僕は死ぬみたい」

罪人ユー「ちがう。それは主観」

罪人ググ「でも、本当なんだよ。うわあ、ネットのそこら中が、死刑執行のニュースばかりだ。マキナの人類の死刑執行が始まったんだ」

罪人ユー「面白いものの見方。そんな風に世界を見る人がいたのね」
罪人ググ「でも、ユー。このネットの二ユースが本当なんだよ。現実なんだよ。これが実際に起きている事件なんだ。二億人が首吊りの刑になつたらしいよ。あと、二億人は、飛び降り自殺の刑になつたみたいだ」

罪人ユー「あはは」

罪人ググ「ユー、笑つたね。初めて笑つた。でも、ここで笑うのは感心しないよ。大事件だよ」

罪人ユー「これから、ググはどんな夢を見るのかなあ」

罪人ググ「夢？　これが夢だつていうのかい。だつて、ユー、きみと通信ができているんだよ。そんな夢はありえない」

罪人ユー「うんうん」

罪人ググ「よく聞いてくれ、ユー」

罪人ユー「何？」

罪人ググ「大事な話なんだ」

罪人ユー「何？」

罪人ググ「馬鹿げた話に聞こえるかもしれないけど、僕はきみを守りたいんだ」

罪人ユー「あはは」

罪人ググ「僕はきみの命を助けたいんだよ。よく聞いてくれ」

罪人ユー「聞いている」

罪人ググ「どうして、自殺未遂なんてしたんだ。なぜ、死にたくなつたんだ」

罪人ユー「それは、世界が滅亡するから。責任を感じて」

罪人ググ「そうだ。きみが神から客体を盗んだ罪によって、人類は滅亡する」

罪人ユー「でも、わたしは死なない」

罪人ググ「なぜ」

罪人ユー「ググがいてくれたから」

罪人ググ「ありがとう」

罪人ユー「ううん。お礼をいうのはこっちの方。本当に、ググが生きのびたのは偶然だった」

罪人ググ「でも、僕ももうすぐ死んじゃうんだよ。ユー、きみも殺されるんだ」

罪人ユー「ちがう」

罪人ググ「なにがちがう」

罪人ユー「だから、それは主観」

罪人ググ「誰の主観でもいいから、死んじゃうんだよ。死んじゃダメだ、ユー」

罪人ユー「ねえ、ググ。わたしにはわからなかったの。神さまは客体がなくても、存在できるのかな」

罪人ググ「え？」

罪人ユー「ちよつと、気になるの」

罪人ググ「難しいな。神さまなら、客体がなくても存在できるんじゃないかな」

罪人ユー「そう。なら、どうなるか、わたしにもわからない」

罪人ググ「ユー。いったい、客体で何を見たんだい」

罪人ユー「この世界の本当の姿」

罪人ググ「それは、断罪機関に世界中の人々が死刑にされているところだろう」

罪人ユー「はずれ」

罪人ググ「わからないや」

罪人ユー「わたしにわかっていることは、わたしとググは、主観を通してしか通信をとることができないってことなの。だから、それがどんな主観になるのかわからないの」

罪人ググ「つまり、断罪機関に次々と死刑にされているっていうネットのニュースは僕の主観なのか？」

罪人ユー「わからない。誰の主観なのか」

罪人ググ「それなら、やつぱり、これは、現実なんだよ」

罪人ユー「人は主観の中を生きるものだって、神さまがいつてた」

罪人ググ「へえ」

罪人ユー「ならば、できるだけ、良い嘘を見て生きるといい。そう神さまがいつてた」

罪人ググ「どういうこと？」

罪人ユー「それでね。神さまが、わたしにどんな夢を見たいか聞いたの」

罪人ググ「ああ、そういえば、客体を見つけてしまったことで、夢っていつてたね」

罪人ユー「そう」

罪人ググ「どんな夢を見たいって神さまに答えたの？」

罪人ユー「世界の滅亡をたった一人で生き残る夢」

ググは、絶望した。＜神の発見＞で神から客体を盗んだ少女は、よりにもよって、世界が滅亡することを求めたのである。それなら世界は滅亡するだろう。客体からつくられる少女の主観は、世界の滅亡であり、その中をググは生かされているのだろう。

誰が悪いのかって、運が悪かった。

子供の頃、世界が滅亡する中、たった二人の男女が生きのびることを夢見たことがなかったとは、ググにはいいきれない。

世界の滅亡にたった二人で生きのびる。それは、とても幻想的で芸術的で、美しい。人生を生きるのなら、世界の滅亡にたった二人で生き残りたいものである。

これは、人々の求めている必要悪だろうか。滅びゆくものの美しさを愛するのは、良いものだ。諸行無常、万物必衰なら、儚げに生きるからこそ、生き物の本懐であるといえるかもしれない。

なるほど、ググは、ユーが望んでいた夢に共感を覚えずにはいられなかった。

でも、なぜ、世界の滅亡に「たった一人」なんだ。

「たった二人」だったなら、わかる。

でも、「たった一人」というのは、本当に世界の拒絶、現実から

の脱走だ。

なぜ、世界の滅亡に「たった二人」で生きのびることを夢見るググではなく、世界の滅亡に「たった一人」で生きのびることを夢見るユーが客体を手に入れたのか。

ググは思いきって、ユーに聞いてみた。

罪人ググ「ユー。ユーは、神さまから客体を盗んで、世界の滅亡にたった一人で生き残る夢を見たんだね」

罪人ユー「ちがう、ちがう。全然ちがう。ググ、勘ちがいしているよ。世界の滅亡は、ユーが夢見るから行われているわけじゃないんだよ」

罪人ググ「じゃあ、どうして、世界が滅亡するんだ」

罪人ユー「ねえ、聞いても怒らない？」

罪人ググ「怒らないよ」

罪人ユー「本当に怒らない？」

罪人ググ「怒らないからいつてみてよ。覚悟はできたよ」

罪人ユー「じゃあ、いうね。あのね」

罪人ググ「うんうん」

罪人ユー「それが、壊れちゃったの」

罪人ググ「壊れた？ 何が」

罪人ユー「だから、その、客体」

罪人ググ「はあ？」

罪人ユー「だから、世界の客体は壊れちゃったのよ」

少し意識が遠ざかるかとググは思った。

客体が壊れたということは、この世界から、客観的視点が失われたことを意味する。

世界は、ヒトが決して感知することのできない客体というものよりどころにできており、我々が見ている世界は、人それぞれの主観でしかない。

世界は主観の集合だともいえる。

だが、主観は、あくまでも客体を反映したものであるため、客体がなくなれば、主観が存在できるのかはともあいまいなものである。

それほど、客体とは大切なものであり、客体は世界を支える支柱なのだ。

罪人ユー「ねえ、ググ、聞いている？ 聞いている？」

罪人ググ「ああ、聞いているよ、ユー」

もはや、ググは絶望していた。

罪人ユー「でもね、客体を壊した時、わたし、自分の客体だけはちゃんと守ったの」

罪人ググ「え？」

罪人ユー「だからね、わたしは世界が滅亡しても決して死なないの」

罪人ググ「本当？ よかった。なら、ユーは無事なんだね。ユーは生きていられるんだね」

罪人ユー「そうなの。わたしは生きていられるの」

罪人ググ「本当によかったよ。僕は、ユーを生き残らせるために命を捨てる覚悟だったんだ」

罪人ユー「あはは」

罪人ググ「本気だったんだよ」

罪人ユー「うん。ありがとう」

罪人ググ「それじゃあ、僕は、世界のみんなと一緒に処刑されてこようと思うよ。さようなら、ユー」

罪人ユー「待って」

罪人ググ「なんだい。どうせ、死は向こうからやってくる。今、二ユーが入ったよ。マキナの撃った核兵器が爆発して、爆風が地球を十周するだろって。それで、世界のすべてが滅んでしまうんだ。

ユーを残してね」

罪人ユー「だから、待ってって。話にはまだ続きがあるの」

罪人ググ「何？」

罪人ユー「それがね、壊し方が下手だったみたいで、残っちゃったのよ」

罪人ググ「何が」

罪人ユー「それがね、ググの客体」

罪人ググ「はあ？」

罪人ユー「だから、わたしの意図しないところで偶然、ググも生き残っちゃったの。世界の滅亡を」

罪人ググ「どういうこと」

罪人ユー「だから、何があっても、ググは死なないんだよ」

罪人ググ「え？」

罪人ユー「偶然、ググの客体は残存したの。わたしとググの二人だけは、何があっても、世界が滅亡しても、生き残るんだよ」

罪人ググ「本当？」

罪人ユー「本当。それがわたしの盗んだ客体の実体」

罪人ググ「僕たち、世界の終わりにたった二人なのかい？」

罪人ユー「そう。わたしたち、世界の終わりにたった二人なの」

東京に何百発の核兵器が落ち、爆風が地球を十周するという誰かに主観の中で。

おそらく、それは、少女ユーの主観の中で。

ググとユーは世界が吹き飛ばされる中、たった二人で生きのびた。あとはどうなってもいいような、素敵に幻想的な日のできことだった。

二人は、お互いに肩を寄せ合い、うつとりとするほど、相手に体重を預けながら、世界が終わる風景を眺めつづけた。

ググが気がついてみれば、つまり、ここ最近のできことは、<神の発見>から起きたすべてのできごとが、少女ユーの主観の中で

きごとだったのである。なんのことはない。みんな、<神の発見>の時にはすでに死んでいたのだ。みんな、<神の発見>の時以来、存在をなくしていたのだ。

存在したのは、ただ、少女ユーと幸運の人ググの二人だけだったのである。

これからは、二人の見る主観の中を二人は共に生きるのだろうし、そうでないのなら、おそらく、神さまが介入するだろう。

ググとユーで、全人類を産むのは難しい話ではあるし。

そう考えると、ググの主観には、ユーは裸で、ユーの主観には、ググは裸であった。

睦み合い、お互いに愛を育てて生きることになるのかもしれない。

邪魔するものは何もない。

それが、世界の終わりにたった二人で生き残るということだった。ググの客体が残ったのは、本当に偶然だったのである。

世界の終わりにたった一人で生き残ることを夢見た孤独な少女に与えられた贈り物であった。

ユーは、ググが生き残ってくれて本当によかったと、心の底から思ったのだった。

4 (後書き)

SF作家になるのが、わたしの選んだ将来の夢でした。でも、十四年間SFを書いてきて、もうネタ切れです。

独創的なSFをもう書けそうにありません。

この作品を最後に、わたしは、SFをあきらめるかもしれませんが、大学生の時に感じたセンスオブワンダーを読者に少しでも感じてもらえれば、

幸いなのですが、もう、独創的な作品を書けなくなって、ずいぶんがたちます。2007年の時に、すでにわたしは、ネタ切れになった

といい始め、それでも、それから膨大な量を書いてきました。

頑張つて、来年の創元SF短編賞に備えて、アイデアを考えようとは思いますが、

無理かな。さすがにもう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8073s/>

神の発見

2011年4月29日14時22分発行